巻頭のことば

吉岡知哉教授には、二〇一八年三月三一日付けをもって、定年より本学を退職されることとなりました。先生は、一九八〇年四月、本学法学部助手に採用され、ひきつづき、一九八二年四月には専任講師に昇格され、爾来三六年の長きにわたり、本学に勤務されました。とりわけこの間、法学部長を二期四年にわたり務められるとともに、二〇一〇年四月には立教大学総長に就任され、今日に至るまで本学の発展にも多大の寄与をされました。

吉岡先生の学問上の専門領域は、ヨーロッパ政治思想史、就中ジャン＝ジャック・ルソーを中心とした一八世紀フランス政治思想史の研究です。吉岡先生の主著である『ジャン＝ジャック・ルソー論』は、第六回渋沢クローデル賞を受賞するなど、その学術的意義の高さについては多言を必要としないでしょう。ところで、この本の序の中で、若き日の吉岡先生は、カッシーラー、ドラテ、スタロビンスキーといったルソー研究の巨人たちに対して、先生自身は、「ルソーの思想表現」の特質に焦点を定め、ルソーを「表現者という位相において捉える」ことをめざすのだと宣言しておられます。

周知のように、ルソーは狭い意味での政治思想という枠に収まらない広がりを持った思想家で、彼の作品とその影響は、文学はもとより教育学など広範な範囲におよびます。そして、吉岡先生のルソー研究もまた、狭義の政治思想に留まらない広がりを持っています。と言うよりもむしろ、吉岡先生ご自身がもともと持っていた幅広い教養とご関心が、この思想家を研究対象に選ばせたのかも知れません。しかし、そうした幅広い関心の背後には、一貫して、この「表現」と「表現者」へのまなざしがあったのではないでしょうか。

吉岡先生を親しく知る者は皆、先生が文学、美術、音楽、映画からマンガに至るまでの芸術諸分野の愛好家でありすぐれた鑑賞者だったことを知っています。もちろん、芸術は表現行為の代表です。とりわけ、吉岡先生の映画

にたいする造詣は趣味の域を超えていました。先生は、蓮実重彦氏が主催した伝説の映画批評誌『リュミエール』にも幾度も寄稿されているほか、身近なところでは『法学周辺』にもハワード・ホークスに関するエッセイを載せておられます。

吉岡先生を語る上で、教育者としての側面も欠かすことが出来ません。教育もまたある意味で表現行為だと言えるかも知れませんが、ただしそれは、一方向的なものではあり得ず、教師と学生の間の相互的なコミュニケーションです。そして、ルソー本人とは違って、吉岡先生は、そうした意味で、すぐれたコミュニケーターでした。先生の講義や演習、基礎文献講読によって学問の面白さに目覚めた学生は数えきれません。そしてその中には、本学や他大学の大学院に進学して、研究者として活躍している卒業生も少なくありません。

冒頭において述べましたように、吉岡先生は、法学部長として二期四年間、総長として二期八年間、すなわち実に在職期間のほぼ三分の一を、法学部、さらには立教大学全体の発展のために捧げられました。こうした役職においても、吉岡先生が「表現者」としての力量をおおいに発揮されたということに注目したいと思います。それはとりわけ、総長として、さまざまな機会に行ってきた式辞やスピーチによく現れています。なかでも、二〇一一年三月、東日本大震災の影響で中止となった卒業式の代わりに、総長である吉岡先生が、卒業生に、いやそれだけでなく立教大学のすべての学生と教職員に向けて、ウェブサイトを通じて届けた「今こそ徹底的に考えぬけ」という力強いメッセージは、本学の枠を超えて、多くの人々に感銘を与えました。

吉岡先生は、総長時代、またそれ以前から、リベラルアーツの重要性を力説されてきましたが、実は、吉岡先生その人が、誰よりもこのリベラルアーツの精神の体現者であったと言えるでしょう。

ここに私どもは、このような感謝と惜別の念を込め、先生のご退職記念号を編み、座右に献呈することといたしました。今後とも先生にはこれまでと変わらぬご指導をお願い申し上げるとともに、併せて先生の今後益々のご健

康とご活躍を祈念し、巻頭のことばといたします。

二〇一八年三月

立教大学法学会長　神　橋　一　彦